声 Voice　　朝日新聞 2018 年（平成 30 年）5 月 11 日（金）

子どもたちの力になりたい

大学生　上田　優華
（奈良県　18）

将来の夢は児童福祉施設で働くことだ。こう決意したのは中学生のときだ。当時、複雑な家庭環境で育った仲良しの友人がいじめられている、と話してくれた。つらい思いをしても、家族や周りの人に笑顔を絶やさない姿は立派だった。

どの子も学校で夢を追いかける権利はあるのに、境遇が違うというだけでいじめられ学校に通いにくくなる雰囲気が嫌いだった。友人のような境遇の子を「助けたい」「力になりたい」という思いが強くなった。

経験を積みたいと思い、高校では聖歌隊に所属。老人ホームなどで歌や演奏を披露するボランティアを通して福祉を学ぶ楽しさを教えてもらった。人と交流できる活動は新たな発見が多く、大学でも続けている。子どもたちをサポートできる人になりたい。

承諾番号　「18-2342」

声 Voice　若い世代こう思う「お出かけ」

朝日新聞 2018 年（平成 30 年）5 月 12 日（土）

憧れの電車通学 なめていた

大学生　石原　真子
（大阪府　18）

高校は自転車通学だったため、大学生になって初めて電車通学をしている。少し憧れていたが、いざ始まってみると憧れの気持ちは完全になくなった。

蒸し暑い、苦しい！　正直、満員電車をなめていた。身動きは取れないし、カバンは邪魔になるし、足は踏まれるし、踏んでしまうし。満員の区間はたった数分、それでも我慢できないくらいサウナ状態だ。

しかし最近、慣れてきた。出発時刻より早く来て一番前に並び、電車が来たら乗客の隙間に乗り込む。後ろからどんどん押されて、反対側の降りるドアの方まで押し込まれるというコツを見つけた。

満員電車を経験して約１カ月経った。満員状態はこの先も変わることはないだろうが、頑張って乗り切ろうと思う。私が憧れていた優雅な電車通学は、いったい何だったのだろう。

承諾番号「「18-2361」

＊朝日新聞社に無断で転載することを禁じる